

GNU Makeの使い方

慶應義塾大学理工学部物理情報工学科
渡辺

ハンズオン用リポジトリ

https://github.com/kaityo256/make_tutorial

Makeとはなにか

ビルドツールの一つ

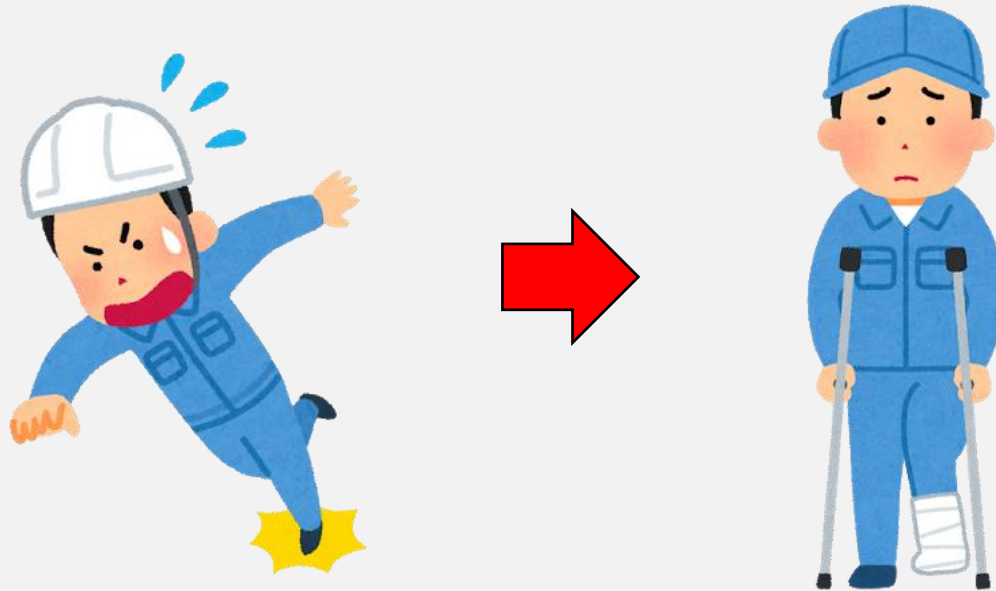
- プログラムのビルドを自動化してくれる
- **依存関係**を認識してくれる
- インストールなどの作業も自動化できる

コード開発にはビルドツールは必須

他には、CMake、Rake (Ruby)、SCons (Python)、Ant (Java)など多数

なぜビルドツールが必要か？

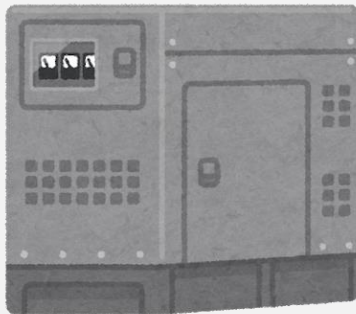
人間は間違える生き物だから



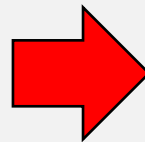
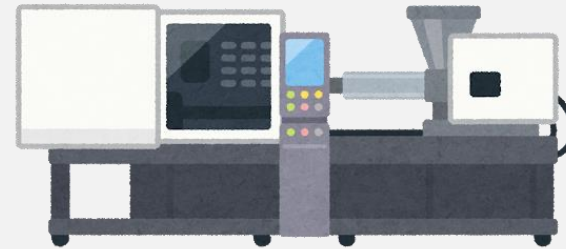
依存関係のあるタスク

装置AとBからなるシステムがあり
Aの電源を入れてからBの電源を
入れないとBが壊れてしまう

装置A



装置B



ありがちな解決策

テプラによる注意喚起



↓ 装置Bの電源確認！！！！



←Bが上がるまで押さない！

ありがちな解決策

危機管理を人間の注意力に依存してはならない

↓ 装置Bの確認！！！！



←Bが_るまで押さない！

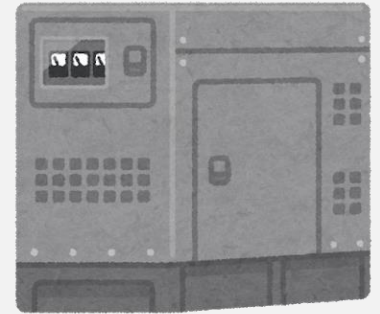


正しい解決策 のひとつ

「これを押せば良い」というボタンを一つ作る

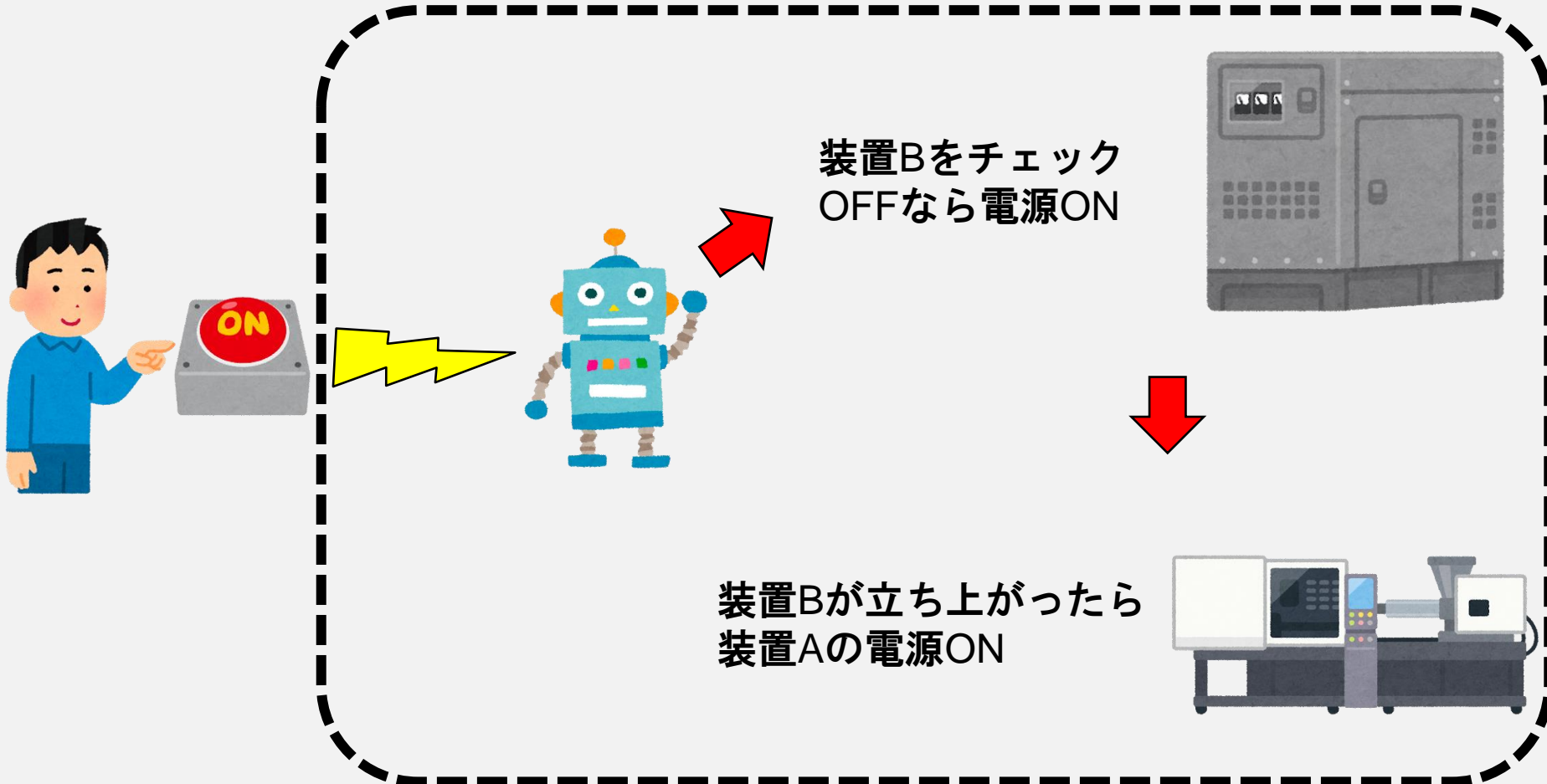


とにかくボタンを押せば
よしなに解決してくれる



正しい解決策 のひとつ

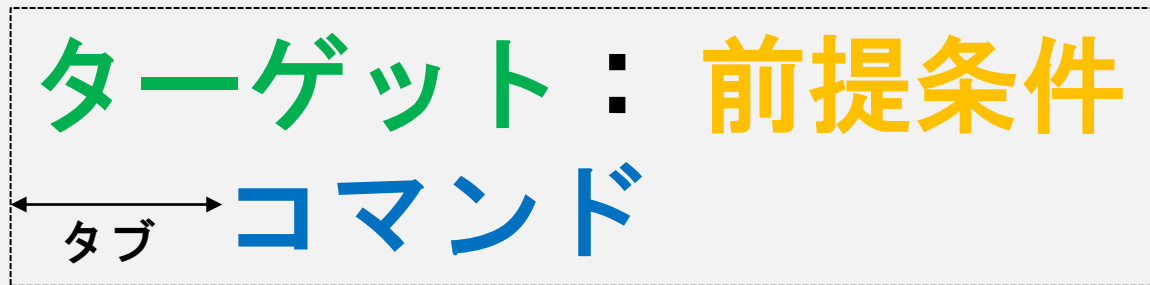
「これを押せば良い」というボタンを一つ作る



内部では依存関係を認識し、正しく処理

ルール

Makeでは、条件とコマンドを「ルール」として記述する
ルールは、ターゲット、前提条件、コマンドから構成される



ターゲット 実現したいこと、作りたいもの

前提条件 実現していなければならないこと

コマンド 前提条件が満たされているとき、
ターゲットを作るために必要なこと

C++の分割コンパイル

以下の3つのファイルを考える

param.hpp

```
const int N = 10;
```

main.cpp

```
#include "param.hpp"
#include <cstdio>

void show(void);

int main(void) {
    printf("main: N is %d¥n", N);
    show();
}
```

sub.cpp

```
#include "param.hpp"
#include <cstdio>

void show(void){
    printf("sub: N is %d¥n",N);
}
```

C++の分割コンパイル

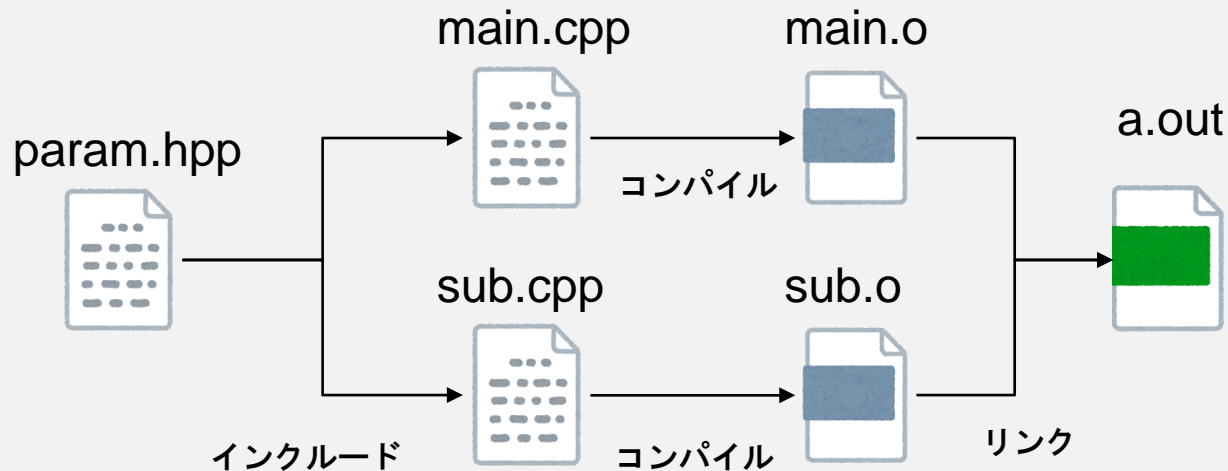
ビルド方法

```
g++ -c main.cpp
```

```
g++ -c sub.cpp
```

```
g++ main.o sub.o
```

依存関係



C++の分割コンパイル

まずは手順をそのままMakefileに書く

Makefile

```
all: a.out
```

```
a.out: main.o sub.o  
    g++ main.o sub.o
```

```
main.o: main.cpp  
    g++ -c main.cpp
```

```
sub.o: sub.cpp  
    g++ -c sub.cpp
```

C++の分割コンパイル

カレントディレクトリにMakefile/makefileがある状態で makeを実行

```
$ make
```

```
g++ -c main.cpp
```

```
g++ -c sub.cpp
```

```
g++ main.o sub.o
```

ビルドが実行される



makeは、ファイルを指定しないと
Makefileもしくはmakefileを探しに行く

C++の分割コンパイル

all: a.out

ターゲット

引数なしで実行した場合、暗黙に最初のターゲットを指定したことになる

※デフォルトターゲットが未指定の場合

前提条件

最終的に欲しい物をallの前提条件として書く

コマンド

なし

C++の分割コンパイル

a.out: main.o sub.o
g++ main.o sub.o

ターゲット a.outを作りたい

前提条件 そのためには main.oとsub.oが要る

コマンド main.oとsub.oが用意できたら
リンクしてa.outを作る

C++の分割コンパイル

main.o: main.cpp

g++ -c main.cpp

ターゲット main.oを作りたい

前提条件 main.oが無いが、main.cppより
古ければ作り直す

コマンド main.cppからmain.oを作る方法

C++の分割コンパイル

ビルドをきれいにするルール「クリーン」を作る

clean:

```
rm -f a.out *.o
```

ターゲット

ビルドをきれいにしたい(clean)

前提条件

なし

コマンド

中間ファイルや最終ターゲットを削除

```
make clean  
make
```

これでクリーンビルドできる

C++の分割コンパイル

cleanも追加したMakefile

```
all: a.out
```

```
a.out: main.o sub.o  
    g++ main.o sub.o
```

```
main.o: main.cpp  
    g++ -c main.cpp
```

```
sub.o: sub.cpp  
    g++ -c sub.cpp
```

```
clean:  
    rm -f a.out *.o
```

← 似たような記述が繰り返されている

DRY原則

Don't Repeat Yourself

同じような記述を繰り返してはならない



※ 例えば一部を修正した場合、残りの修正忘れが発生するから

パターンルール

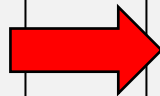
all: a.out

a.out: main.o sub.o
g++ main.o sub.o

main.o: main.cpp
g++ -c main.cpp

sub.o: sub.cpp
g++ -c sub.cpp

clean:
rm -f a.out *.o



まとめる

all: a.out

a.out: main.o sub.o
g++ main.o sub.o

%.o: %.cpp
g++ -c \$<

clean:
rm -f a.out *.o

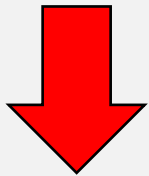
パターンルール

a.out: main.o sub.o

マッチ

a.outを作るにはmain.oが必要

%.o: %.cpp



マッチにより%=mainと展開

main.o: main.cpp

自動変数(マクロ)

main.o: main.cpp

g++ -c \$<



依存関係の一番左に展開される

main.cpp

他には ・ ・ ・

\$@ ターゲット名に展開 (main.o)

\$* パターンがマッチした部分 (main)

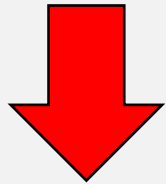
等多数

※ 気になったら「make 自動変数」で検索してください

パターンルール

`%.o: %.cpp`

`g++ -c $<`



ターゲットとしてmain.oがマッチ

`main.o: main.cpp`

`g++ -c main.cpp`

sub.oも同様

変数

```
all: a.out
```

```
a.out: main.o sub.o
```

```
g++ main.o sub.o
```

```
%.o: %.cpp
```

```
g++ -c $<
```

```
clean:
```

```
rm -f a.out *.o
```

コンパイルとリンクで
同じコマンドを使っている

別のコンパイラを使う時、二か所を修正しなければならない

➡ DRY原則に反する

変数

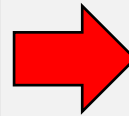
CXXという変数を定義し、g++という値を代入

```
all: a.out

a.out: main.o sub.o
      g++ main.o sub.o

%.o: %.cpp
      g++ -c $<

clean:
      rm -f a.out *.o
```



```
CXX=g++
all: a.out

a.out: main.o sub.o
      $(CXX) main.o sub.o

%.o: %.cpp
      $(CXX) -c $<

clean:
      rm -f a.out *.o
```

使う時は\$(変数名)とする

コンパイラを変更する場合は、一か所だけ修正すればよかった

依存関係

このMakefileには、param.hppの依存関係が正しく入っていない

```
all: a.out
CXX=g++

a.out: main.o sub.o
    $(CXX) main.o sub.o

%.o: %.cpp
    $(CXX) -c $<

clean:
    rm -f a.out *.o
```

依存関係をmakeにどうやって教えるか？

依存関係



がんばって人間が依存関係を書く



ツールに自動的に依存関係を抽出させる



人間のミスを防ぐための仕組みを
人間が作るのはナンセンス

依存関係

g++はMake用の依存関係を出力できる

```
$ g++ -MM *.cpp
```

```
main.o: main.cpp param.hpp
```

```
sub.o: sub.cpp param.hpp
```

ファイルにリダイレクトして

```
$ g++ -MM *.cpp > makefile.dep
```

Makefileにインクルードする

```
-include makefile.dep
```

完成

```
all: a.out
CXX=g++

a.out: main.o sub.o
    $(CXX) main.o sub.o

%.o: %.cpp
    $(CXX) -c $<

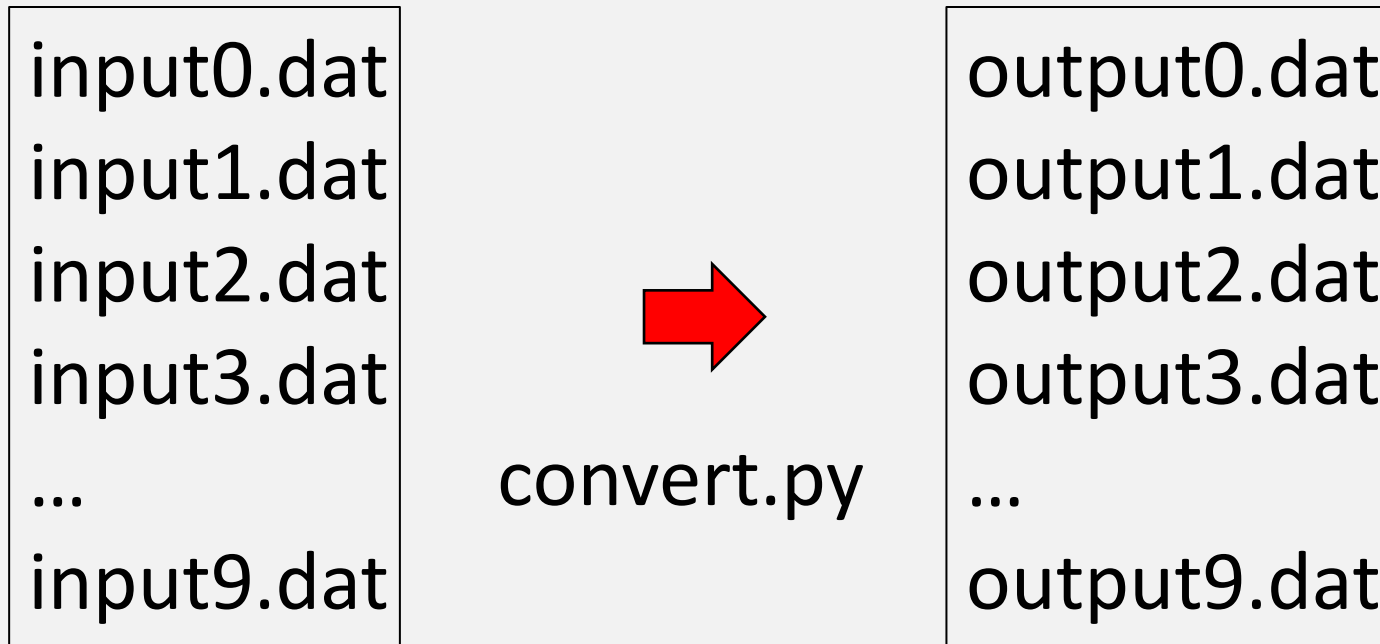
clean:
    rm -f a.out *.o

-include makefile.dep
```

※ 依存関係を自動で作ったり、ソースファイルを自動で取得したり、
まだ自動化できる部分はいろいろある

makeの応用例:データ 処理

大量のデータをスクリプトで変換したい



```
python convert.py < input0.dat > output0.dat
python convert.py < input1.dat > output1.dat
python convert.py < input2.dat > output2.dat
...
```

makeの応用例:データ 処理

こんなMakefileを書けばmake一発で変換できる

```
INPUTS=$(shell ls input*.dat)
OUTPUTS=$(INPUTS:input%=output%)

all: $(OUTPUTS)

output%: input%
    python convert.py < $< > $@

clean:
    rm -f $(OUTPUTS)
```

シェル関数

```
INPUTS=$(shell ls input*.dat)
```



実行結果を変数に代入する



```
INPUTS=input0.dat input1.dat input2.dat ... input9.dat
```


変数の置換

```
OUTPUTS=$(INPUTS:input%=output%)
```

別の変数を、パターンマッチにより置換する

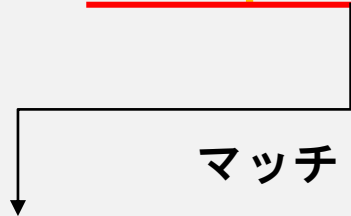
```
INPUTS=input0.dat input1.dat ... input9.dat
```



```
OUTPUTS=output0.dat output1.dat ... output9.dat
```

パターンルール

all: output0.dat output1.dat ...



output%: input%

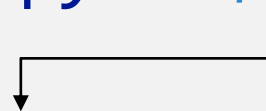
python convert.py < \$< > \$@



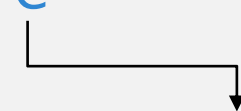
% = 0.dat

output0.dat: input0.dat

python convert.py < \$< > \$@



input0.dat



output0.dat

Makeによるデータ処理



更新されたファイルのみ変換されて効率的



make -j による並列ビルドができて便利



データの変換方法が記録として残る



三日後の自分は他人

「データフォルダでmakeすればよい」とだけ覚えておけば良いので、判断力を消費しない

※ makeではなくシェルスクリプトでも良いから、とにかく自動化&保存

Makeによる論文ビルド

依存関係と処理をMakefileに記述しておけば、データの更新から論文PDFまでmake一発で行く

データファイル

画像ファイル



python

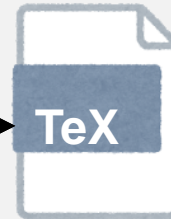


データファイル

画像ファイル



gnuplot



コンパイル



最初に精度の低いデータで図を作っておいて、後から本番の図に差し替える時等に便利

まとめ

依存関係のあるタスクは原則として自動化する

「○○したら○○しなければならない」や
「○○の前には○○すること」は危険信号

データ処理などは原則として自動化しておく

便利のためというより、後の記録のために